分野や業種を超える共創のカタチ
～学問から見た場合～

190323@Impact HUB KYOTO
京都大学学際融合教育研究推進センター　宮野公樹

- 何者か
  - 学際融合教育研究推進センター准教授・国際高等科学研究所客員研究員
  - 専門：哲学、形而上学、政策哲学（かつては金属組織学、医工学、ナノテクノロジー
  - 京都大学の学問の土壌づくり（気風）を目的とする組織で活動。それが我が学問
- そもそも「共創」って？
  - この世で自分だけで完結することってなにかあったっけ？
    - これが学者の構え
    - 「定義しないと議論できない」っていうのとは違う。ただただ深く考えたいだけ。
  - 研究者マインドなら直ちに「どう共創するか？」となるだろう
    - もちろんそれも大事
    - だけど最近はそればかりになってない？
  - ほんとうに大事なことに向き合うのはしんどい
    - 議論に時間がかかる。答えはないから
    - 自分の責任、信じるものに頼ることになるから（自恃）
  - 共創というキーワードに浮かれず、むしろなぜその言葉がもてはやされるかについて考えよう
  - というか、何か新しい単語が出てきたときは注意深くなったほうがいい。何かをごまかしている場合が多い
    - 「●●5.0」といった数字を後につけるやつ
    - 「●●知」とか知を後につけるやつ
    - 「●●力」とか力を後につけるやつ
- 分野って？専門知識って？業界って？
  - 異業種が交わらないとと人はいう。しかし、異業種とは？
  - その道に染まった人。プロ？
    - 言い換えるとその道に囚われた人
    - <学問>ならそうみるんです　例：ベルクソン、宣長、夏目漱石
  - 何かを極めるほど答えor謎は深まる、これ真理（常識）
    - 学べば則ち固ならず（論語）
    - いよいよ神秘が明らかになったのであって、謎が解明されたのとは違う
  - つまり言いたいのは、考えてみれば「専門」とかは守るものではなくむしろ壊すもの
- そう考えることによってコラボの本質がみえてくるのではないか
  - 「自分は変わる用意がある」　謙虚な姿勢　学びに枯渇　問いとして生きる
  - そのような「構え」をもったメンバーが集まればきっとうまくいく
    - これは方法論に先立つ
    - 方法論は山のようにあるが、姿勢（精神、哲学、生き様）のありようについてはほとんどない
  - これらを踏まえると、このような方法論になる（これが本来の正しい順序かと）
    - メンバーが集まった最初の会議、あるいはコラボを募る場においては、参加動機にこだわること
    - そのプロジェクトと我が人生について話しあうこと
    - 適切に正しく失敗を経験すること
- まとめ
  - 如何に自分らは囚われているか
  - ステイクホルダーでビジョンを共有しよう！とか当たり前すぎてるように思える
    - むしろそれを自ずとやってしまうような場づくり（問いや参加動機）のほうが大事
    - そしてなより素晴らしいコラボには素晴らしい出会いがある（人間性）のはいうまでもないこと。
    - 「自分と出会って素晴らしい出会いだったと相手が思ってくれる自分だろうか？」と自分で問う以外に成功も成長もないよね